

筑波大学附属視覚特別支援学校寄宿舎とのオンライン交流を通して

大谷津 和之 ・ 村井 保

本校寄宿舎では、寄宿舎生徒会（舎生会）を中心に、行事の立案及び運営を行っている。しかし、令和2年度から始まった新型コロナウイルス感染症に対する拡大防止対策のため、行事の中止や延期を余儀なくされた。それらに代わる行事の1つとして、舎生会役員を中心に筑波大学附属視覚特別支援学校寄宿舎とのオンライン交流を試みた。この交流は、舎生にとって、他障害との相互理解を深めると共に、視覚障害者に伝えるための工夫やコミュニケーション手段について考えるきっかけになった。今回は、これまで実施した3回の交流会の様子、成果と課題、そして今後の展望について報告する。

キー・ワード：舎生会 オンライン交流 相互理解

1 はじめに

本校寄宿舎は、全国各地から高等部生以上の生徒が38名入舎し、集団生活を行っている。

日頃の生活だけではなく舎生同士の親睦を深めることで生活に潤いを持たせるために、寄宿舎生徒会（舎生会）を置いている。舎生会は、会長・会計・書記・行事係（男女各1名）の計5名の体制で、舎行事の企画及び運営を行っている。

2 交流会開催までの経緯

寄宿舎では、令和元年度3月に新型コロナウイルス感染症の影響を受け、緊急帰省及び閉舎になった。当分の間、休校が続いたが、令和2年度6月に開舎したものの、ほとんどの舎生会活動を中止にした。

行事や活動が制限される中で、役員が行事をやり遂げたという達成感を持つことも重要と考え、どのような活動ができるか、顧問間で検討を重ねた。その1つとして、舎生会発行の新聞（ともしび新聞）を増刊することにした。

ともしび新聞は、これまで主に行事の様子や感想をまとめて掲載していたが、活動が制限されているため、増刊号には役員が筑波大学附属視覚特別支援学校（以下、盲学校）の勤務経験を持つ指導員にインタビューしたものを掲載することにした。（Fig. 1）

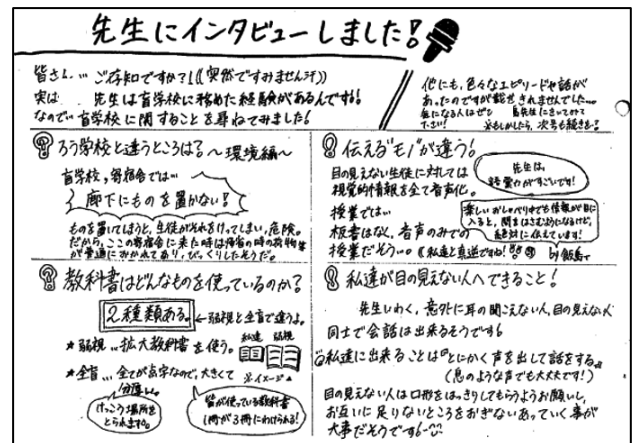


Fig. 1 インタビューの記事

インタビューの時の舎生の様子を顧問間で話している中で、舎生が「音声情報をメインとしている視覚障害者には、私の発音では通じないから何もしてあげられない」と言っている様子があった。また、学校でも、休校中はビデオ会議システム「ZOOM」（以下、ZOOM）によるオンライン学習を進めていたことに着目していたこともあり、オンライン交流会を実施することが、自己理解及び他者理解を深める機会に繋がるのではないかと考えた。盲学校の自治会指導部の担当指導員にオンライン交流会について提案してみたところ、盲学校も集団活動ができない状況に苦慮しており、舎生からも交流会に興味があるという声があったので、実施に向けて検討が始まった。

月に1回の役員会にて顧問から交流会について提

案したところ、やはり、視覚障害者とコミュニケーションが取れるのかといった消極的な声が上がった。しかし、音声認識アプリ等を使った情報保障の方法について話してみると、ぜひやってみたくて意欲を見せる様子が出てきた。

3 交流会の実施に向けて

(1) 懸念されること

障害が全く異なる者同士で行う初めての試みなので、懸念されることがいくつかあった。(Fig. 2)

- ① 聴覚障害者は視覚情報、視覚障害者は音声情報に頼る等、障害が異なるため、コミュニケーションを取る上でどのような工夫が必要なのか。
- ② コミュニケーションに対する不安を少しでも取り除くために、どのような支援が必要なのか。

Fig. 2 懸念されること

(2) ねらい

懸念されることは多いが、実施する意義はありと考へ、以下のねらいを立てた。(Fig. 3)

- ① 視覚障害に対する関心、理解を深める。
- ② 自分の伝えたいことを視覚障害者に伝える方法を考える力を育む。
- ③ 視覚障害者に対して、自分ができるところを見つける。
- ④ 聴者とのコミュニケーションに対する意欲を持たせる。

Fig. 3 交流会のねらい

(3) 情報保障について

① 情報保障の方法

懸念されることを解消するためには、情報保障をどのように行うか、両校の顧問間で本番を想定したシミュレーションを繰り返して行い、検討を重ねた。その結果、本校側の情報保障は以下の通りである。

(Fig. 4)

- ① 手話通訳、読み取り通訳の配置
手話通訳は本校の勤務経験を持つ盲学校の指導員、読み取り通訳は本校の指導員が担当する。
- ② 音声認識アプリ「UD トーク」の併用
舎生の中でも聞こえ方やコミュニケーション手段が様々なので、手話通訳の他に音声認識アプリも併用する。
- ③ 「ZOOM」のチャット機能の活用
盲学校にはチャットの内容を読み上げるソフトがあるので、「ZOOM」のチャット機能を使う。

Fig. 4 情報保障の方法

② 自己紹介の方法

両校の舎生が自己紹介を行うにあたって、本校の舎生に意向を聞いたところ、手話通訳や読み取り通訳を使わずに、自分で工夫して自己紹介する方法に決まった。

「自分の発音がどこまで相手に通じるのか知りたい」と言っていた舎生は口話で自己紹介する、コミュニケーション手段が手話メインである舎生はZOOMのチャット機能を活用して自己紹介する等、各々が盲学校の舎生に伝えるための方法を考へている様子が見られた。

(4) 交流会中のルール

情報保障だけでなく、交流会が円滑に進められるように、ルールを設定した。(Fig. 5)

- ① 内容が分かったかどうかの合図として、拍手をする。(盲学校側は、画面に拍手が映るようにすること。本校側は、拍手の音を出すこと。)
- ② 発言の前に、自分の名前を言う。
- ③ 発言の終わりに「終わり」とつける。質問する時は、会話を疑問形で終わらせる。

Fig. 5 第1回交流会のルール

(5) 機材や会場内配置

① 機材について

オンライン交流会を実施する上で、必要な機材は、令和 2 年度全日本聾教育研究大会での実施方法を参考にし、機器を準備した。(Fig. 6)

- ・ PC2 台 (ZOOM の操作、舎生用)
- ・ プロジェクター (ZOOM の画面をスクリーンに映すため)
- ・ スクリーン
- ・ マイク
- ・ テレビ (UD トークを映す)
- ・ iPad (UD トーク用)
- ・ LAN ケーブル
- ・ LAN ケーブル用の分配器
- ・ HDMI ケーブル

Fig. 6 交流会で使用する機材

② 会場配置について

交流会は食堂で行うことにし、舎生がどこからでも見やすいように機材を配置した。(Fig. 7)

ZOOM の画面は、本校の舎生、盲学校の舎生、手話通訳担当の盲学校指導員の 3 つにした。

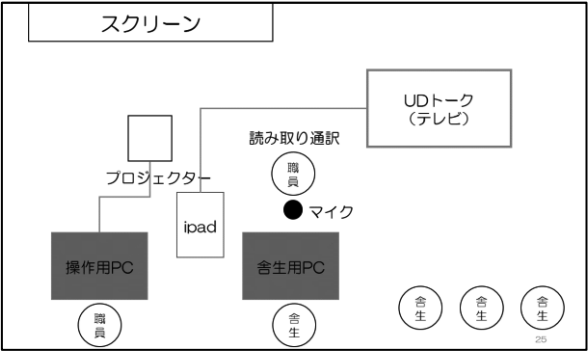


Fig. 7 第 1 回の会場内配置

(6) 交流会のテーマ

両校の舎生に、お互い聞いてみたいことは何かを募った。その結果、交流会の前半は自己紹介、後半は日常生活の便宜を図るための補助具を紹介することにした。本校側が紹介する補助具は、表 1 の通りに決まった。

表 1 紹介する補助具

補聴器	人工内耳	ロジャー
目覚まし時計	ホワイトボード・黒板	iPad
インターホン	フラッシュランプ	赤色回転灯
低周波ブザー	非常用バイブレーター	廊下にテレビ
廊下や天井に鏡	黒板の下に電気のスイッチ	

(7) 補助具の紹介文作成

補助具の紹介では、読み取り通訳を介することにしたので、読み取り通訳を担当する指導員が、スムーズに内容を伝えられるように、原稿を作成した。その際、盲学校の舎生が補助具のイメージがわくように、物の形状や色等も含めて考えるように促した。しかし、舎生はどのように伝えたらいいか、最初は戸惑っていたものの、最終的には具体的な内容に仕上げていた。

4 第 1 回オンライン交流会

(1) 交流会の日時

令和 3 年 2 月 13 日 午後 2 時半～4 時半 (2 時間)

(2) 本校の参加者

参加の対象は、新型コロナウイルス感染症対策を鑑み、本校側は舎生会役員、盲学校側は交流会に興味がある舎生を対象とした。

本校は、役員以外の舎生もパブリックビューイング形式で参加できるようにしたいと考え、交流会の日が近くなったら、その時の新型コロナウイルス感染症の流行を考慮して、役員以外の舎生の参加有無を判断することにした。

当日は、役員 5 名とパブリックビューイング形式での参加者を合わせて 13 名だった。

(3) 当日の様子

コミュニケーション手段が主に手話である舎生は、自分で相手に手話通訳等を用いずに発表すると決めたものの、自己紹介時、最初不安や自信が無く、一歩引き気味であった。しかし、チャット機能を通して、自己紹介の内容が伝わると安心したためか、補

助具の紹介の時は自分から積極的に伝えようとする気持ちが見られた。(Fig. 8)

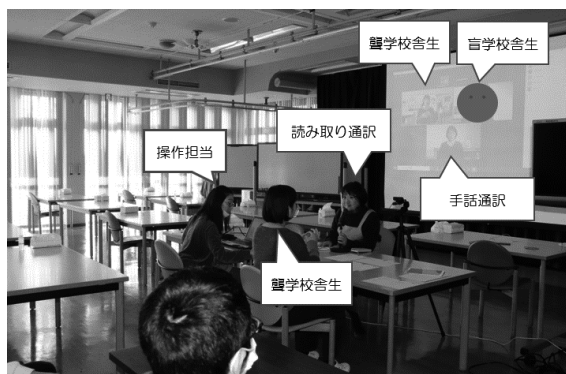


Fig. 8 会場の様子

盲学校の舎生が補助具を紹介しているのを興味深く聞いている様子が印象的だった。パブリックビューイング形式での参加者からも、「次回もあれば是非参加したい」という声が上がった。(Fig. 9)



Fig. 9 パブリックビューイングの様子

(4) 点字の手紙作成

交流会終了後は、盲学校勤務経験を持つ指導員から点字盤の使い方や点字のルールを学び、お礼の手紙を点字で作成した。また、当日の交流会に参加しなかった舎生も、「点字に興味があるから」と自ら挑戦する姿も見られた。(Fig. 10)

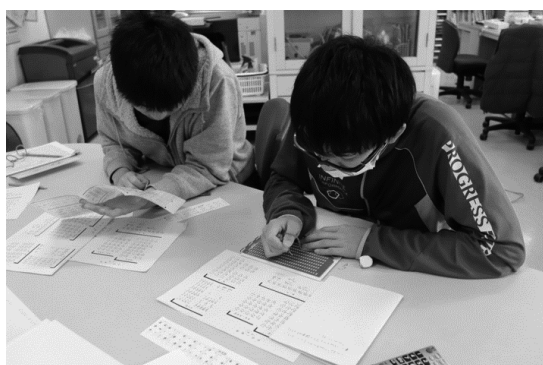


Fig. 10 点字盤で手紙を書いている様子

(5) 成果

自己紹介時、盲学校の舎生が手話を使ってくれたこともあり、「自分たちも、もっと何かできるのではないか」、「発音の練習をしたいと思った」等、感想が上がった。また、「オンラインではなく直接会って交流したい」、「視覚や聴覚の障害に関係なく楽しめるレクリエーションを考えたい」等、次回も参加したいという意欲が見られた。

(6) 課題

情報保障の面において、3つの課題が見られた。

(Fig. 11)

- ① マイクの不調により、ハウリングが何度か起きたため、本校側の音声が盲学校の舎生に届かないことがあった。
- ② 本校側が補助具を紹介する時、舎生の一人が口話のみで説明したため、その場にいた他の舎生に伝わらなかった。
- ③ 読み取り通訳や手話通訳を介したが、予想以上に時間がかかってしまい、全ての補助具を紹介できなかった。

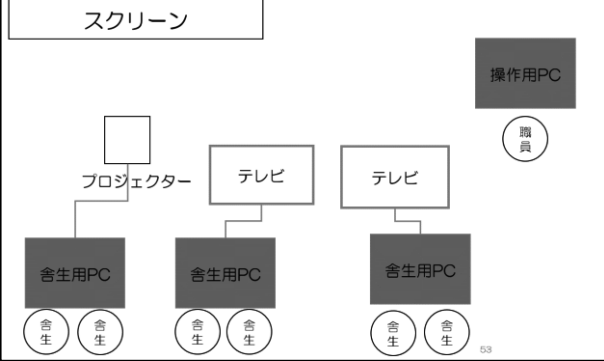
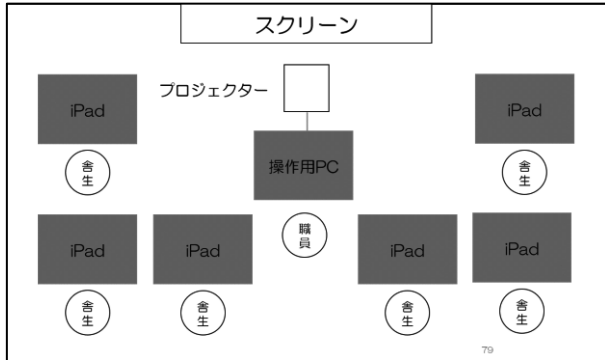
Fig. 11 第1回交流会を通しての課題

5 第2回及び第3回交流会

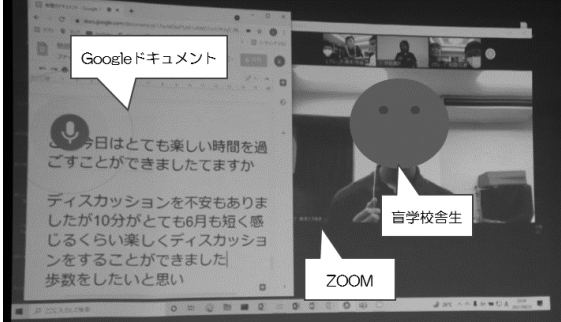
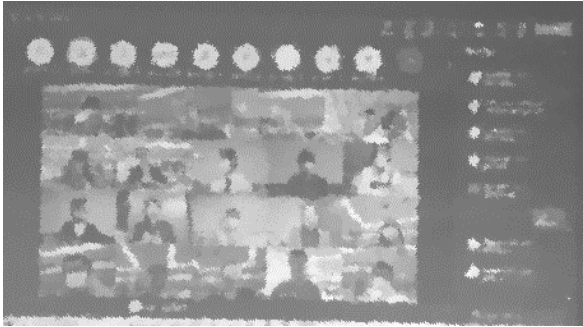
その後も、1年毎に交流会を実施した。第2回からは夜の時間帯に設定したことで、第1回の2時間より1時間短縮しての実施だった。2回の交流会の様子を一覧にまとめた。(表3)

交流会の場数を踏んでいく中で、役員の意識も変わり、パブリックビューイング形式での参加者を募る時には、役員から「これまでの交流会の内容を掲示した方が、今まで参加しなかった舎生や新入舎生にとって交流会のイメージがしやすいのではないか」と活発な意見が出た。

表3 第2回及び第3回交流会の様子

	第2回交流会	第3回交流会
日時	令和3年9月23日 午後7時半～8時半	令和4年9月22日 午後7時半～8時半
テーマ	・舎生同士でコミュニケーションがとれるように、少人数グループでのディスカッションを実施した。ディスカッションのテーマは、以下の2つにした。 ①「お互いの学校や寄宿舎の様子」 ②「趣味について」 ・本校側から、交流会時でよく使う「終わり」、「ありがとう」の手話を教えた。	・盲学校の舎生が、交流会企画を行った。内容は、以下の2つに決まった。 ①「自己紹介〇×クイズ」 ②「寄宿舎〇×クイズ」 ・「寄宿舎〇×クイズ」は、両校から2問ずつ出題した。
参加者	・新型コロナウイルス感染症の流行を鑑みて、パブリックビューイング形式での参加者は募らず、参加者を6名（役員4名、役員以外の舎生2名）に限定した。	・役員4名とパブリックビューイング形式での参加者9名の計13名が参加した。
機材・会場内配置	・第1回で使用した機器を土台として、ディスカッションがしやすいように機器の配置を工夫した。 (Fig. 12) ・新型コロナウイルス感染症の対策として、食堂の他にラウンジも使用した。 スクリーン  Fig. 12 第2回交流会の会場内配置	・GIGAスクール構想に伴い、舎でも無線ネットワークの環境を整備したので、参加者は各自のiPadを使うことにした。 ・ビデオ会議システムとして、学校でも使用している「Microsoft Teams」（以下、Teams）を取り入れた。(Fig. 13) ・会場は、食堂を使用した。 スクリーン  Fig. 13 第3回交流会の会場内配置
情報保障	・「UD トーク」より、Google の音声入力機能「Google ドキュメント」の方が、誤変換が少ない理由で取り入れた。 ・舎生の希望で、できる限り通訳を介さず舎生同士でコミュニケーションが図れるようにした。読み取り通訳は舎生の主なコミュニケーション手段や、	・音声認識として、Teams のライブキャプション機能を使うことにした。 ・盲学校から、チャットが入るタイミングが分かるように、チャットを入れる前に合図を示してほしいと要望があった。合図をどうするか、役員で相談して合図を決めた。

	要望に合わせて行うこと、チャット機能を積極的に活用することにした。	・参加者一人一人が iPad を使用することにした。
ル ー ル	・第1回のルールを基に、舎生と相談しながら見直した。(Fig. 14) 1. 発言の前に、自分の名前を言う。 2. 発言の終わりに「終わり」とつける。質問がある時は、会話を疑問形で終わらせる。 3. 内容が理解できたことを示すために、拍手や頷き等リアクションを積極的に返す。 4. 内容が理解できなかった場合は、遠慮なく積極的に聞き返す。 Fig. 14 第2回及び第3回交流会のルール	
当 日 の 様 子	・盲学校の舎生に手話を教える時、言葉だけで伝える難しさを実感した様子が見られた。実際に正しい手話を表現できた盲学校の舎生は少なかった。その反省から、盲学校の舎生が触って手の形が分かるようにできないかと話になった。 ・ディスカッションでは、各々の寄宿舎の楽しいエピソードについて伝え合い、それぞれのグループから笑いが出るほど、有意義な時間を過ごすことができた。 また、盲学校の舎生に話した内容が伝わったかどうか、相手の反応をうかがいながら、話すスピードを遅めにして言い直す、チャット機能を積極的に使用する等、それぞれがコミュニケーション方法を工夫している様子が見られた。(Fig. 15)  Fig. 15 ディスカッションの様子	・第3回の司会進行は本校が担当した。読み取り通訳を希望せず、口話で話すことになったが、最初は、緊張しているのか声が小さかった。その後は、慣れてきたのか堂々と自信を持って司会進行する様子が印象的だった。(Fig. 16)  Fig. 16 司会進行の様子 ・〇×クイズに皆で参加し、ゲームを通して寄宿舎の様子をお互いに知ることができ、各々終始楽しんでいる様子が見られた。 ・「寄宿舎〇×クイズ」で本校からの出題時、発表担当の舎生に、予め読み取り通訳や、手話通訳の希望を確認できたので、本番ではスムーズに進めることができた。(Fig. 17)  Fig. 17 第3回交流会の様子

成果	・ 舎生同士でコミュニケーションがとれるような環境を作ったこと、少人数によるディスカッションを実施したことで、第1回と比べてコミュニケーションが活発に行われる様子が見られた。	・ 発音の明瞭度が高い役員が、自分の話した内容が相手に伝わったことが分かったと、「もし対面交流ができた時は、自分が読み取り通訳をしてみたい」と自信を持つ様子が見られた。
課題	・ 本校の参加者のほとんどが人工内耳装用で、日頃から聴覚を活用しているため、盲学校側の音声小さく、聞き取りにくかったという意見が多かった。 ・ 「Google ドキュメント」を取り入れた結果、第1回と比べて誤変換は少なかったが、盲学校の舎生が話し始める時に、マイクのアイコンを押す必要があるため、押すタイミングが難しいという意見も出た。(Fig. 18)  Fig. 18 Google ドキュメントと ZOOM	・ 「ライブキャプション機能で日本語を表示させる」、「参加者全員をチームのメンバーとして登録する」の設定等、Teams を使う上での事前準備に時間がかかった。 ・ 参加者全員の iPad の音声をオンにするとハウリングが起きる。発言者がその都度オンに切り替える方法に変えたために、内容を理解できたことの合図として拍手する音が盲学校の舎生には伝わらない場面が何度かあった。 ・ 画面上のレイアウトでは、参加者の人数が多かったために画面が小さくなり、手話通訳や字幕が見づらかった。(Fig. 19)  Fig. 19 Teams の画面レイアウト
参加者の感想	・ 盲学校の舎生と話す貴重な経験ができて良かった。話をしていて、親近感が湧いてきて楽しかった。 ・ 手話を教える時に、文だけで説明するとなると思うように伝わらず、違った手話になってしまうので、文だけでは難しいと思った。 ・ 音声小さくて分かりにくかった。 ・ 音声を字幕に変える機能が常にオンになっていた方が良かった。 ・ ディスカッションの時、趣味の話についていけない人もいたので、ディスカッションのテーマを工夫する必要があるかもしれない。	・ ○×ゲームを通して、盲学校の様子を知ることができて良かった。 ・ 今まで視覚障害者と会ったことはあるが、交流は無いので、良い経験になった。もっと盲学校について知りたい。 ・ 交流会の時間は1時間では足りないと感じた。3時間位欲しいと思った。 ・ iPad に手話通訳の画面が映らなかったのも、スクリーンを見たが、手話通訳の画面と字幕が小さくて見にくかった。

6 3回のオンライン交流会を通して

(1) 舎生の様子

オンライン交流会を始めた当初は、舎生は遠慮がちであったが、交流会を積み重ねていく中で次第に、視覚障害者に対する興味や関心が高まり、意欲的にどのようにコミュニケーションを図ったら良いかを考えようとする様子が見られた。

第2回の交流会では、手話を言葉で説明することの難しさを感じ、手の形を触ってわかるようにしようと有志で検討を行った。

デコレーションペン（描いた後に、線が浮き出るタイプのペン）でイラストを描き、点字と墨字で説明のキャプションをつけた。初めての体験のせいか、思うように作業が進まず、完成まで時間を費やしてしまったが、弱視の舎生にも楽しんでもらえるように、イラストに色を塗って飾り付けをする等、工夫を凝らし、相手の障害について配慮する様子が見られた。(Fig. 20)



Fig. 20 デコレーションペンを使っている様子

(2) 課題

① 交流会の日時設定

この2年間で交流会を3回実施したが、開催するにあたって、盲学校寄宿舎と本校寄宿舎の日課や職員の勤務体制が異なるため、日時設定が容易ではなかった。

② 情報保障

パソコン上の音声認識では機能の精度上、全ての発言を正確に文字化できないので、その辺りのカバーをどのようにしたら良いか考えていく必要がある。

これまでの手話通訳や読み取り通訳をそれぞれ一人の指導員が担当したが、今後は、交流会時の舎生の様子や状況に応じて臨機応変に対応できるように、複数の指導員が手話通訳及び読み取り通訳を担当する等、職員の役割や体制を見直したいと考えている。

7 おわりに

新型コロナウイルス感染症対策の一環として始めた行事ではあったが、回数を重ねていく毎に舎生自身も楽しんでいる様子が見られるようになった。盲学校の舎生も、交流会の内容を提案する等、交流会が恒例行事の一環として定着されつつあるように感じる。

また、卒業後に向けて、情報保障やコミュニケーション方法をどのようにしたら良いか考えるきっかけにもなった等、交流会を通して、自分自身を見つめ直す機会に繋がったのではないかと考える。

今後は、3回のオンライン交流をきっかけに、相互理解をさらに深めて、お互いの障害の特性を学び、そして、コミュニケーションを円滑に運ぶ術を少しずつ自分たちの手で作っていった欲しいと願っている。

また、盲学校との交流については、オンライン交流会に限らず、対面での交流も視野に入れていきたいと考えている。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。